

氏名(本籍)	入江康平(徳島県)			
学位の種類	博士(学術)			
学位記番号	博乙第2509号			
学位授与年月日	平成22年4月30日			
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	堂射の研究			
主査	筑波大学教授	博士(学術)	藤堂良明	
副査	筑波大学教授	博士(文学)	佐藤臣彦	
副査	筑波大学准教授	博士(体育科学)	酒井利信	
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	大戸安弘	
副査	筑波大学教授	博士(文学)	山本隆志	

論文の内容の要旨

(目的)

本論文はその嚆矢が古代末期にあるとされ、近世に至り隆盛をみた堂射(通し矢)を研究対象としたものである。堂射は約120メートル先の静止した標的に矢を放ち、その的中の有無を中心課題としていたため、他武道に比べて早期に競技化がなされたと考えられる。筆者が長年にわたり収集・整理した資料の分析を通して、三十三間堂の歴史と堂射、競技場としての各建築物の規模や設備、通し矢の矢数記録、堂射用の弓具、堂射の射法・射術、堂射の運営と役員・役務、堂射中に服用した漢方薬、堂射是非論の展開などの実態を明らかにし、わが国の武道文化や近代スポーツ文化のあり方に照らして、どのような意義を持つかについて考察したものである。

(対象と方法)

武道の研究方法は、運動学的手法によるものと、人文・社会学的手法によるものとに大別できる。本研究は、後者の人文・社会学的手法の視点から堂射を論じたものである。これまで堂射に関する先行研究は非常に少なく、特に堂射の総合的研究は皆無であった。そこで本論文では、近世武術の文献にみる堂射関係資料や近世の矢数記録関係資料、堂射関係の施設・設備・用具関係資料、堂射実施丹関わる町方記録、堂射関係の各種絵図・浮世絵、近世法令関係資料、近世の随筆・評論などにミル堂射関係記事、体育・スポーツ・武道関係刊行物の中にみる堂射関連記事、堂射関係文献にみる漢方薬などの文献学的研究を中心に行った。また、筆者が実際に堂射経験者からの聞き取り調査も交えて行った点にも特徴がある。こうした手法により、今を去る4世紀も前に隆盛し消えていった堂射文化の実態を浮き彫りにしていったのである。

(結果)

わが国の弓射は、その運動特性から他武道に比較して古代より競技性を強く持っていた。中でも近世になって盛行した堂射は、身体的安全確保のもと客観的な評価基準により公開の場で行われ、好成績が経済的見返りや社会的地位の向上が期待できるという近代的性格を持つ運動文化であった。時代が下るにつれ、堂射での好記録達成のために用具・技法・稽古法などの工夫が凝らされるようになり専門化が進んだ。そして絶後

と考えられる記録が樹立されることにより、時間や射距離、矢数などの条件を組み合わせた新たな種目の細分化が図られ、またコンディション維持のために薬物を用いた形跡も見られるようになる。これが今日スポーツ界で問題になっているドーピングに当たる疑いがあるとすれば、わが国のスポーツ史の中でも特筆すべき事項となるだろう。

いずれにしても、堂射は17世紀初頭から中期頃すでに生命の安全性の確保、競技規定や評価基準の整備、技の数量化、競争の機会均等、民主的な競技運営の確立、競技の公開性など近代的特質を帯びた運動文化として行われていたことが判明した。本論文は堂射の全貌を解明すべく、筆者が数十年にわたり発掘してきた資料を分析・検討を加えて作成したものであり、ここで浮き彫りになった諸問題は、わが国の現代及び将来の武道やスポーツのあり方を考える上で、多くの示唆に富む課題を提示してくれたと思う。

審 査 の 結 果 の 要 旨

審査委員会では、堂射には近代スポーツ化の要素が含まれていたという研究であったが、逆に近代化されなかった部分はどこであったのかを明らかにするとともに堂射の特徴が出てくるのではないかと、といった意見はあった。しかし、入江氏の堂射についての幅広い研究に対し、その長年にわたる努力に対する敬意は皆の一致するところであった。

論文審査ならびに審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。